**説教20230716ローマ8：9-17マタイ13：1-9，18-23「み言葉を悟り、歌え」**

**今日の題では、御言葉を歌え、としましたが、それは、聖書にかかれているイエス様の言葉を、愛好して、感謝しほめたたえて、その御言葉を自分のうちにお迎えして、いつもいつも口ずさむということです。御言葉は喜んで歌うことによって、益々、その御言葉が自分の中で喜びとなって、内側から湧き出でる枯れない泉となって、終生の友となり又導きとなって、自分を生かして下さるのです。温泉に喩えてみれば、それはモータ等の動力を必要としないで、内側からこんこんと自然に湧き出て来るに喩えることが出来るでしょう。**

**わたしたちが御言葉を喜んで歌えるために、イエス様は、よく喩えを用いて御言葉を語られました。今日のマタイの聖書箇所は、「タネをまく人」の喩えと言う見出しがつけられています。また、来週の主日は関川先生による特別伝道礼拝でありますが、その説教題は、「聖書が教える生き方―野の花、空の鳥を見なさい」となっております。「野の花、空の鳥を見なさい」と言われたのは、ほかならぬイエス様御自身ですが、イエス様は何だか、人の人生を、野の花、空の鳥と見比べて、それらに喩えて語られようとされているのだなあということが期待されます。あまり来週のことを言うと、先入観を与えてしまって宜しくありませんのでここらへんで辞めますが、とにかく、たとえ話と言うのは、花や鳥と言った、目に見えて手に取れるような物事を引き合いに語られるので、私たちはその話にそこはかとない興味と期待とを抱くことでしょう。イエス様も私たちがそのようにして御言葉に興味を持って、それを期待しながら聞けるように望みつつ、様々なたとえ話をされたのだと思います。**

**イエス様のたとえで、「野の花、空の鳥」と言うのは、その実物のことであります。今の世の中では、この様に敢えて断っておかないと、子ども達は、図鑑で野の花を調べ、ビデオで空の鳥を見て、あー私は野の花、空の鳥を見た、と思ってしまうかもしれません。しかし、イエス様が、2000年前に、この地上を歩まれた時には、図鑑もビデオもありませんから、人々は生身の実物の花や鳥を見て、それに触れて、それを知るしかなかったのです。そして、この生身の実物に見て触れるということは、今の世の中でも変わらず非常に大切な事なのではないでしょうか。願わくは、この一週間の間に、私たちが出来る限り、野っぱらに赴いて、そこに存在する野の花、空の鳥の実物に触れることが出来ますように、主の導きを祈ります。**

**今日イエス様が語られます「タネをまく人」の喩え話では、私たちの生涯が、種に喩えられ、又、御言葉がタネに喩えられています。そして種まく人も、何かを喩えているのですが、そのことがはっきりと明示されることはありません。とにかく、今日のたとえ話では、種と言う、私たちの目には見えづらく、隠されている物が、喩えの対象ですので、そこに様々な解釈や見方が生まれる余地がたくさんあるのです。イエス様は、敢えてこういった単純明快ではないたとえ話を聴かせることによって、私たちに御言葉を悟るようにとうながしておられるのだと思います。**

**今の世の中は、全てを敢えて可視化して、私たち人間が見えるようになれば、そこに理解と、これからの展望が開ける、と言うスタイルをとっていますので、聖書のこのような何か釈然としない、隠された宝を探すようなスタイルは世の中に受け入れられないことがあります。しかし、私たちは辛抱強く、イエス様の御言葉によって、そこにその都度示される喜びと真理とを、素直に受け入れながら、御言葉を味わい歌って参りたいと願います。**

**マタイ福音書13章 1節2節**

**その日、イエスは家を出て、湖のほとりに座っておられた。すると、大勢の群衆がそばに集まって来たので、イエスは舟に乗って腰を下ろされた。群衆は皆岸辺に立っていた。**

**イエス様は今日の「タネをまく人」の喩え話を、まず大勢の群衆たちに話すことから始められました。大勢の群衆たちと言うのは、この別府でいえば、駅前に集っている観光客や、病院に集まる患者さん達と言ったところでしょうか。又、イエス様の御言葉に触れ始めて間もない方々もこの群衆の一人に数えることが出来るかも知れません。この集まって来た群衆たちに向けて、イエス様は「種を蒔く人が種蒔きに出て行った」と話しはじめられました。この時この湖のほとりには、実際に畑で種を蒔く一人の人の姿があって、その種まく人を実際に見ながらイエス様は語られたようです。**

**１３章４節以下では、まかれた種たちのそれぞれの行く末が、「蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった」というように語られていきます。**

**私は先日、小学生以下の子ども達に向けて、エリック・カールという人が書いた『ちいさなタネ』という絵本を読み聞かせしました。その物語のあらすじを少し紹介しますと、**

**秋、強い風が吹くようになると、花のタネたちは風に乗って、遠くへ運ばれていきます。**

**飛び出したたくさんのタネのなかに、とくべつちいさいタネがひとつ。**

**ちいさいタネはなかまと一緒に飛んでいきます。**

**タネたちは旅の途中で、太陽に焼かれ、氷の山に落ち、海に落ち、砂漠に落ち・・・力尽きていきます。**

**風がやんで地面に落ちても、鳥に食べられ、ねずみに食べられ、人に踏まれ・・・。**

**しかし、ちいさいタネは困難を乗り越えて、元気いっぱいに大きくなり、見事な花を咲かせます。**

**こんな内容ですが、この絵本には、この小さな種が、人間の一生をあらわしていると言った解説の文言は一切ありません。しかし、この絵本を読んだ人は誰しも、捕らえ方は人それぞれでしょうが、この小さな種が、自分たちの一生を喩えているのだなあという様に、読み込むのではないでしょうか。特にまだ人生経験が少ない子ども達は、この物語を読む事によって、この小さな種のことから大きくイメージを膨らませて、自分の人生にそれを反映させることが出来ることでしょう。この様に私たち人間の人生は、ただ事実の積み重ねにより平板に過ぎ去るのではなく、常に何らかの物語を読み込むことによって、又、新しい歩みを歩み始めることでありましょう。**

**マタイ福音書１３章４節以下でも、まかれた種たちのそれぞれの行く末が、イエス様によってリアルに語られていきますが、これを聴いた群衆たちは自ずと、これらの種のことと自分たちの人生とを比較して、様々に思い又、感じるのではないでしょうか。そしてイエス様からこんなタネの物語を聞かされたら、大概の人は、その結末が、鳥に食べられるのでもなく、焼けて枯れるのでもなく、茨にふさがれるのでもなく、良い土地に落ち、実を結んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなるように、希望するのではないでしょうか。**

**そしてこの希望こそ、イエス様が、各自の内に植え付けようとされていますタネなのでありましょう。私たちはこんな希望に満ち溢れたイエス様の御言葉を聞けば、自ずと御言葉を歌い、絶えず口ずさみたくなることでしょう。イエス様の御言葉は、私たち各自の内側に、感情を落ち着かせ、感情が満たされる拠り所として受け入れられることによって実を結び、それから百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にも膨らんでいくことでしょう。**

**わたしたちは、イエス様の御言葉をこの様に歌うことによって、大勢の群衆たちに告げ知らせることが出来るのです。**

**以上が、今日のマタイ福音書の箇所の前半部ですが、これから、その後半部、１３章１８節以下を見て参りましょう。**

**この後半部では明らかに、時間が経過し、場所も、弟子たちだけがいる処へと移されています。さて、この新しい場面で、イエス様は群衆たちにではなく、弟子たちにだけ、この「種をまく人」の喩えを、再び語られるのですが、その語り口の変化を私たちは心に留めて参りたいと願います。**

**「だから、種を蒔く人のたとえを聞きなさい。だれでも御国の言葉を聞いて悟らなければ、悪い者が来て、心の中に蒔かれたものを奪い取る。道端に蒔かれたものとは、こういう人である。・・・**

**イエス様は弟子たちを前にしてこの様に語り始められました。すぐに気づくことですが、群衆たちに語った前半部に比べて、このイエス様の御言葉には、重い言葉が見られます。「御国の言葉を聞いて悟る」ですとか「悪い者が来て、心の中に蒔かれたものを奪い取る」というようにイエス様は語られます。今日の説教題は、「み言葉を悟り、歌え」ですが、確かに、歌うことと較べますと、悟るということは、重いことであります。クリスチャンであっても、時に、御言葉を悟るということから逃げ出したくなるような瞬間や場面も数多く訪れることでしょう。さらにイエス様は、**

**御言葉のために艱難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまう人**

**御言葉を聞くが、世の思い煩いや富の誘惑が御言葉を覆いふさいで、実らない人**

**という様に、弟子たちに単刀直入に言って聞かせます。**

**これらの御言葉は、言うまでもなく、十字架の苦難を前にして逃げ出してしまって、イエス様から離れてしまう私たち、この世の誘惑に負けて、罪深いことに思い煩ってしまう私たちへの、最後まで絶えることなく言って聞かされる戒めの御言葉であります。私たちはこの様なイエス様の重い御言葉をも、歌えるようになってこそ、本当にイエス様と最後まで共に歩むことが出来る幸いを、自らのうちに深く味わえるようになるのだと思います。**

**イエス様は後半部の最後で、弟子たちに向かって、「良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて悟る人であり、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結ぶのである」という様に締めくくっておられます。**

**イエス様は御言葉を悟るということの大切さをここで語っておられます。**

**わたしたちは素直に考えて、自分の生涯が、百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結ぶものでありたいと希望することでしょう。それは、前半部で見た大勢の群衆たちも同じ希望を抱くのでありますが、イエス様は、御自分のことを深く知り、その十字架の死と復活の命のことを知った者たち、即ちクリスチャンに対しては、「み言葉を悟りなさい」と言われます。この「み言葉を悟りなさい」という御言葉を、私たちはイエス様の十字架の死とそれからの御復活とを思い起こす時、高らかに声をそろえて歌いたくなることでしょう。**

**「み言葉を悟りなさい」というイエス様の御言葉は、私たちが最後の時迄聞き続けることが出来る、愛の御言葉であります。その意味は安易に理解しつくことが出来ません。が、**

**その意味の一端は、私たちがイエス様の御言葉を心を開いて聞き、喜んで聞き、そして理解し、さらに聞いた通りに実行するということでありましょう。**

**今日の種を蒔く人の喩えで、種を蒔く人として喩えられているのは、この世にあって、自分の口を通してイエス様の御言葉を、隣り人達に宣べ伝えている、私たち自身のことであります。私たちは、隣り人達が、百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結ぶことが出来るよう、折が良くても悪くても、御言葉を述べ伝えるという役割を、この世にあってイエス様から与えられています。私たちは、その役割を、「み言葉を悟り、歌いながら」いつも喜んで果たして参りたいと願います。**

**祈り**

**主よ、あなたは御子イエスの言葉を私たちに与え、この口であなたを賛美する歌を私たちに与えて下さいました。感謝します。どうか私たちが御言葉を悟り、百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結ぶことが出来るよう恵みを降し導いて下さい。**

**又、私たちの隣り人達が、同様に、百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結ぶことが出来るよう、あなたの福音を隣り人達に宣べ伝えさせてください。**

**み言葉は、私たちの内に着地し、感情を落ち着かせ、感情が満たされる拠り所となって下さいました。私たちが、この世でのどんな災難や災害に会おうとも、あなたが私たちの拠り所となって、常に守って下さいますように。**

**殊に、各地で被害をもたらしている大雨を、どうか治めて下さい。被害に遭われている方々をあなたが癒し、慰めて下さい。**

**この世にあって、あなたが語られる、御子イエスの救いと、復活の命の出来事を、私たちが口ずさみながら、触れ合うものがみな、御子イエスの救いと、御復活をしることが出来るように、どうか恵みを下さい。**